確率と脳死と臓器移植と

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
確率と脳死と臓器移植と

【Ｎコード】
Ｎ３１８６Ｐ

【作者名】
安藤ナツ

【あらすじ】
純白の魔女新里鈴音が一人語る、脳死とは？

「ねえ、あなたは臓器移植についてはどう思う？」
新里鈴音は、名前の通り鈴のような可憐な声で訊ねた。
「知ってると思うけど、脳死した人間の生きている臓器を取り出して、それを他人に移植するっていうあれよ。なんだか、漫画みたいな話よね」
彼女が美しいのは声だけではかい。真っ白なパーティドレスに隠しきれない凹凸のはっきりした妖艶な身体に、白く長い四肢が職人の金細工のような精緻さで繋がっている。その天辺にのる頭部は小さく、彼女の身体に美しい比率を生み出していた。大きく潤んだ瞳に、艶やかに塗られた紅。最小限の化粧で、最大限に自分を美しく見せ、白いドレスに栄えるのは腰まである漆黒の髪。
全身黄金比の美しさを持った彼女は、非合法の煌びやかなカジノのメインルーレット台の上に、この世の主人を思わせる不遜な態度で存在していた。
「勿論、この臓器で誰かが助かるならそれに越したことはないと思うわ。でも、臓器を取られた人はどうなるの？」
舞台女優のように大袈裟に手振りを付けて、鈴音は周囲の人間に問うた。
すると、乾いた花火爆発するような音が周囲の空気を揺らす。それと殆ど同時に、鈴音の足元に置いてあった赤青黄色と派手な色が付いたチップが宙を舞う。
返事は銃声だった。
舞台である巨大なルーレット台を囲むように並んだ男は実に十二人。その全員が黒いスーツを着用し、日本では滅多にお目にかかれない拳銃を持っているのだから、その正体は簡単にわかるだろう。簡単に言えば、このカジノを取り締まるとある非合法な組織が用意したバウンサーである。

「あらあら、そんな物を持ち出して。私にそれは通用しないわ」
足元に打ち込まれた銃弾を目で追うこともせずに、鈴音は指を一度鳴らす。声とは違い、擦れた情けない音であった。
が、それを気に掛ける人間はいない。同時。十二人全員の手の中にあった拳銃が全て暴発したのだから。一斉に炸裂した爆発音と、男たちの悲鳴を、鈴音は無表情で堪能すると、話を続けた。
「さて、そのままの姿勢で聴いてちょうだい。私がこの話題を出したのは、大して意味はないの。偶々、本当に偶然。そう、あれはあの『嵐』から電話があった時のことよ。その内容は確かこう」
鈴音は喉を押さえて二・三度咳払いをすると、『おい？　暇か？　《四真屋敷》。暇ならそのまま聞いてくれ、暇じゃないなら、今すぐ俺の話を聞く準備をするんだ。いいか、今週の日曜日、指定のホテルに来てくれ？　あ？　ちげーよ。俺には可愛い年下の奥さんがいるんだ、お前に仕事を頼みたいんだよ。そう、仕事だ。ホテルの地下で開かれる違法賭博を取り締まってほしいんだ。勿論、お前に頼むんだから、それなりの仕事さ、《独楽蜂》って知ってるか？　知らない？　じゃあ、ググっとけ。結構最近売れてきた暗殺者さ。そいつが、その賭場を仕切っているらしんだ。そいつを殺せば終了のぼろい仕事さ。あ、生死は問わずだから』と、男の声で一息に喋り切った。誰を真似て見たかは知らないが、おそらく、寸分の類もなく声を真似して見せたのだろうと安易に想像がついた。
「で、ググったのよ。最近は便利よね？　ちょっと深く潜れば大抵の情報が手に入るもの。で、その時。ホームにしてるニュースサイトに、『脳死患者からの本人の許可のない臓器移植』がどうのこうのって記事をね」
鈴のような美しい声が、吹き飛んだ手の痛みに唸り声をあげる男たちの声を上書きする。
「へー、あんた面白い能力を持ってるな」
そして、ようやく鈴音の言葉に返事が来た、もっとも、彼女の期待に応えれるような答えではなかったが。

相槌を打ったのは、如何にもな若者であった。二十代になるかどうかと言ったところであろうか？　全員がスーツを強制されるこのカジノに置いて、彼のみが正装ではなかった。だぶだぶの大きなＴシャツに、ジャラジャラとネックレス。ズボンも同じように巨大で、腰よりもかなり下にベルトを巻いている為、その裾にはほつれが目立っていた。何より、室内で野球帽をかぶっているのが鈴音の理解の外であった。

「あんた、アレだろ？　俺を捉えに来た能力者でしょ？」

「そんな所よ。あなたが《独楽蜂》？　中々独創的な格好ね」

男の態度に、鈴音は皮肉を返す。弟の世界ならまだしも、年下に舐めた態度をされて、許せる鈴音ではない。

「そ、俺が《独楽蜂》。螺旋の《独楽蜂》さ」

自らの能力に付けられた名前を、恍惚の表情で名乗り上げながら、独楽蜂はスロットに据え付けられた椅子を右足でサッカーボールのように蹴飛ばす。

すると、アンカーボルトでしっかりとコンクリートに固定されていた椅子が、クルクルと回転を始めた。しかも、奇妙なことに公園にある遊具のようなスピードではない。ブーン。ブーン。と、モーターが回るような重低音を鳴らしている。

「なるほどね。回転の超能力」

鈴音は不快感丸出しに、呟いた。女の子らしく、虫を思わせるその音を不快に感じているようである。

「おっと、舐めちゃあ駄目だぜ？　回転の力をな！」

独楽蜂は喋りながら、どんどんと椅子を蹴飛ばしていく。蹴飛ばされた椅子は重力などのこの世の理を無視して、次々と高速回転を始め、終いには空中に浮かび、さながら本物の虫のように狭い地下カジノの中を飛び回っていた。

「舐めてないわ。あなた、ＳＢＲ読んでないの？」

あの鉄球を出すまでもなく、回転とはもっとも強力なシステムである。

例えば、地球。
この星は様々な回転に支配されている。地球自身が回る自転。衛星である月が一日一回の公転。地球自身が太陽の周りを公転している。さらに言えば、周囲の星々も自転や公転をしている。太古から、この巡りを人々は進行している。その回転に意味を見出し、特別な儀式や呪術を人類は編み出してきた。
例えば、命の循環。
弱肉強食でも、食物連鎖でもいい。この世界は食うか食われるかで回っている。これを否定する人間は少ないだろう。捕食者側は、そうやってどんどんと協力になっていく。この循環は、もっとも単純に力を得る方法だ。蠱毒などが有名だろうか？　人間は例外だとのたまう人間がいるかもしれないが、そんなことはない。土葬だろうと火葬だろうと、分解焼却された肉体は地球に帰っていく。
このように、回転すると言う意味は様々な現象を含んでいる。
そんな『回転』の意味をイデア界から引っ張り出して、対象に添加する能力が弱いわけがない。
使う人間の頭の回転まで上げられないのは残念ね。鈴音は小声でそう付け足した。
「さあ！　どうする？　綺麗なねーちゃん！　生きたまま犯されたいなら今の内だぜ！」
回転して飛び交う無数の椅子を無言で眺める鈴音に、独楽蜂が下品に笑う。人より優れていることを鼻にかけた、誰もが嫌悪を感じる声であった。
「話は戻るけど、臓器移植ね。と言うよりは、脳死についての話かしらね？」
が、嫌悪を感じながらも、鈴音は自分の話を続けた。こないだ思いついた自分の意見を誰かに言わなくては気が済まなかった。
勿論、そんな態度を赦す程、独楽蜂は気が長くはなかった。
「あーあ、死体じゃあ盛り上がらないんだけど」
感情のない瞳と言葉で独楽蜂が呟くと、宙を泳いでいた椅子が一

斉に鈴音目掛けて襲い掛かった。
巨大な蜂が実に七つ、回転の中心が定まっていないのか、大きくぶれながら高速で落ちていく。
　刹那の間を置かず、轟音と共に巨大なルーレット台が七つの椅子によって大きく吹き飛んだ。周囲に倒れ込んでいた黒服の人間がゴミ屑のように巻き込まれていたが、独楽蜂はそれを気にするわけもなく、その様子に高笑いをしていた。
「ひゃーっひゃひゃ、弱っ！　何が臓器移植だっての！　無駄に大物ぶりやがって！」
「そうね、臓器移植。あれって、脳死の人間から奪うのはどうかと思うのよ」
　その後ろで、鈴音はひっそりと話を続けた。
「脳死って、死んでいるわけじゃない？　パソコンで言うとモニターとスピーカーが壊れただけだと思うの」
　独楽蜂はすぐさま振り返り、距離を取るが、鈴音はそんな大きな動きにすら興味がなさそうに、気だるげに溜め息をついた。
「あなた、自分が思っているほど強くないことを自覚してる？」
「なに？」
「だって、私がどうやって背後に回ったかもわからないんでしょ？」
　そう言って、鈴音は瞬きの間に独楽蜂の背後に回る。
高速移動や催眠術と言った、ちゃちな能力ではない、恐ろしい片鱗を独楽蜂は感じた。
「まさか、時間を……」
「不正解」
　そう言って、鈴音が再び指を下手くそに鳴らす。それを合図に、粉々に吹き飛んだはずのルーレットが時間を巻き戻したように元通りの形に復元された。
「まさか、時を……」
「不正解」
　鈴音が指を鳴らす。失敗したにも関わらず、鈴音はルーレット台

の上に一瞬で立っていた。
　そして、お前が下、俺が上だと、独楽蜂を見下す。他者を見下す冷徹な瞳が、鈴音には良く似合っていた。これが褒め言葉かどうかは微妙だが。
「脳死。脳死って、絶対死ではないわよね？　って、さっきも話したわね。ごちゃごちゃ煩いから混乱しちゃったわ。脳ってさ、一体なんだと思う？」
「何って、考える所だろうが！」
　絶対零度のような黒色の瞳に耐え切れなくなった独楽蜂が、ずり下がったズボンから、無数のパチンコ玉を取り出して、空中に放り投げる。
　通常ならそのまま万有引力によって地面にぶつかる筈の銀色に輝く玉は、高速で回転を始めブーン、ブーン。と唸りをあげる。先ほどの攻撃は大味過ぎて躱された。そう判断した独楽蜂は、この小さなパチンコ玉に回転のイデアを添加し、銀玉をシルバーバレットへと変貌させる。
　魔性殺しの弾丸が、二十七。通常の弾丸とは違い、その全てが三百六十度、上下左右と打ち出せるとあれば、脅威以外の何物でもないだろう。
　が、
「例えば、さっき吹き飛んだ黒服君。彼らは今も死にかけだけど、生きている。心臓が動いているからね」
　鈴音はそんなものは存在しないと、自らの超能力によって復元させたルーレット台の上で演説を続けた。
「でも、七名ほどは気絶をしている。ブラックアウトって奴ね、あまりの衝撃に彼らの脳はすべての情報を遮断しているの。さあ、これは脳死？　勿論違うわよね？」
　言葉の最後に、鈴音は再び指を鳴らす。今日初めて、まともな音が指先から『パチン』と鳴った。満足げに、鈴音は一人微笑む。それと同時に、《独楽蜂》と化していたパチンコ玉が全てその勢いを

失った柔らかい絨毯に落ちた。
「な！　何だお前の能力は！」
自分の能力が突如打ち消されたのを見て、独楽蜂は間抜けなことを問う。そんなことを問う時点で超能力者としての器が知れると言うものだ。相手の能力を見抜くのが、戦闘の醍醐味なのだから。
すくなくとも、鈴音はそう考えている。が、自分の能力が理解しにくい能力だと言うことも十分理解している。
だから、大きなヒントを口にした。
「当ててみてよ。そうしたら戦ってあげる。そうね、ヒントは『あり得ることはあり得たこと』かしら？　いや、『あり得ないことはあり得たこと』でもいいわね」
それは、可能性を意味する彼女なりの暗喩であったか。
「気絶は脳死じゃあない。それは何故？　私は医学に明るくないけど、脳死って奇蹟的な確率で治る人もいるんでしょ？　だったら、その点では気絶と一緒。要するに、外の情報を受けても肉体的な生理反応を起こさないってことでしょ？」
鈴音の独り言に、「知るかよ！」と独楽蜂がそこら中の物を《独楽蜂》にして中空に浮かべるが、喋りながらも指を鳴らす鈴音にすべてが阻まれる。
「あ、奇跡的な確率って、大ヒントよ。抓っても、針で刺しても反応しないんでしょ？　脳死した人間って。でも、どうしてそれが『死んだ』ことになるの？　リアクションの薄い、感情の起伏が少ない人間は、良く笑う人間よりも『死に近い』ってわけ？　違うわよね」
独楽蜂の必死の抵抗をあざ笑うこともせず、淡々と鈴音は持論を展開していく。退屈な授業を思い出させる、独り善がりな語りであった。
「喋らないし、動かない人間だから……そう言えば昔は植物人間って言っていたけど、今は言わないわね？　表現規制かしら？　馬鹿馬鹿しい。兎に角、自己主張がないから、脳が死んでいると。『人

間は考える葦である』意味は知らないけど、考えない人間はタダの葦ってことよね？　ああ、だから植物人間？　また話が逸れちゃった。考えることが出来ない自己主張が出来ないから、死んでると。脳が死ねば死んだも同然だと。でも、脳味噌って本当に物を考える所なの？」

話の最後に、鈴音がその場で一回だけ爪先でルーレットを蹴飛ばした。それに呼応して、独楽蜂の左腕がひしゃげた。手首から肘までの範囲の骨が、軽い音を立てて砕け散った。

「ぐお！」

「別にね、指を鳴らすことが条件じゃあないの。なんとなく、景気付みたいなもの。疲れたから、脚にしてみたわ」

にこりとも笑わずに、鈴音は左手を押さえてその場に膝まずいた独楽蜂を眺める。対等な人間を見る優しさはそこになく、路傍の石を眺めるようにだ。

「脳って、いかにも大切そうに頭に入っているし、考える時には『頭を使え』って言うでしょ？　でも、それは本当に脳が導き出した答えなの？　だって、脳って情報を集めて指示を出す機関でしょ。最悪、脳を使わない脊髄反射まであるのに、どうして頑なに脳が考えるって言うの？　考えているのは私と言う個人じゃあないの？」

「……お前、一体何をしたぁ！」

「うるさいわ、お馬鹿さん」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

イラついた鈴音の声によって、独楽蜂の左の手の平が、ハンマーで叩かれたようにカーペットの下のコンクリートと同時に砕け散った。

「もう、面倒だから教えてあげる。メイドの土産ね。私の能力は、『無限の可能性』」

勿論、鈴音の説明は完全ではない。

「まあ、正確には無限じゃあなくて、有限の可能性の中から起こり

える可能性を無理やり呼び起こす能力と言った所かしらね？」
　可能性とは、無限にあるものではない。もし、仮に可能性が無限にあるのであれば、その全ての可能性を体験している可能性がある筈なのだ。さらに、その可能性も当然無限であり、産まれた瞬間には全ての可能性を持っていないとおかしい道理になってしまう。無限の可能性とは、所持した瞬間に全てを達成してしまう存在なのだ。
　故に、鈴音の能力は絶対に無限の可能性に到達することはできない。なぜなら、その可能性に到達できてしまったら、『今まで到達できていたはずの可能性』を否定することであり、その逆に『今まで到達できていなかった可能性』を肯定することになってしまう。
　そう言った根本的な矛盾のため、鈴音の能力はあくまで『起こりえる（起こりえた）可能性を現実にする』と言った所が限界である。
「だから、『敵の後ろにいる可能性』や、『ルーレットが壊れていない可能性』。他にも『銃が暴発する可能性』を現実にしたわけ。どぅーゆーあんだーすたん？　あ、この能力で現金を受け取ることもできるけど、経済的な動きと循環を理由に、私はこの能力でお金持ちになることはしないわ」
　あまりにも、常識を無視している能力に、独楽蜂は痛みも忘れた愕然とする。それもそうだ、理論的には《独楽蜂》の能力でさえ、鈴音は扱える可能性があるのだ。いや、一度攻撃に使った物を回転させるなんてお茶の子さいさいの筈だ。
「死ぬ覚悟はできた？」ルーレット台の上から、鈴音は満足そうに独楽蜂の姿を眺める。「それじゃあ、話を戻すわよ？　考えるのは、脳じゃあなくて私。だってそうでしょう？　単細胞の生物だって、エサを求めたり、分裂したりするでしょ？　それを本能だって言うけど、違うでしょ。彼らだって考えているのよ。ＤＮＡに『餌を求めろ』って書いてあるわけないじゃない。あくまで、エサを求めるのは単細胞生物の意志だと思うの。で、進化の過程で細胞をたくさん持った生物が生まれる。そうすると、細胞一つ一つの意見を参考にはできないわ、だって皆考えることが違うんですもの。足と瞳の

細胞が同じ意見を持つわけないのだから。だから、皆の意見を総合して集める場所が出来た。それが『脳』。それを機に、各細胞の考えはすべて脳に一旦あつめて、集めた情報から脳が指示を出すことになった。あくまで、脳味噌は皆の意見の駐留所。考えるっているのは全身ですることなのよ。それに、『心』は何処にある？　って聞かれて脳を指す人はいないと思うの。『脳の科学反応に過ぎない』って人は多いと思うけど」

ここまでが一息、歌うような鈴の音が、血の匂いと呻き声のカジノに染み込んでいく。

途中で如何なる可能性を見出したのか、独楽蜂の身体には無数の刃物の傷跡と、薬品で焼き爛れた皮膚が見え隠れしていた。

「あ、おめえ」殆ど、死体と変わらない独楽蜂が、台詞を口先から細々と紡ぐ。「一体、こんな能力の対価は何なんだ？」

強い力には責任が纏わりつく。物を回転させる能力であれば、本人の体力精神力程度で済むであろう。頑張れば、化学でも再現できないもないからだ。しかし、鈴音の能力は違う。あくまで理の範囲内とは言え、明らかに人間の出来る能力の範疇を越えている。

「寿命よ」独楽蜂の重々しい言い方とは真逆に、あっさりと鈴音が答える。「一年後の範囲内で起こる可能性の範囲なら、一年。一年前の可能性なら一年。そうやって私は寿命を削って戦ってるの、ロウソクみたいでしょ？」

妖艶に初めて心から笑う鈴音に、独楽蜂の身体は小刻みに震えていた。

「兎にも角にも、私は以上の結果から『脳死は死ではない』と結論付けるわ。だって、表現が出来ないだけで考えてはいるんですも……」

最後まで台詞を言い切ることなく、鈴音の綺麗な眉間に直径一センチ程の穴が開いた。噴水のように血が吹き出し、鈴音の身体はルーレットの上に背中から倒れた。

生きている筈もなかった。

「や、やった！」
その事実に、傷だらけの独楽蜂は底抜けに明るい声で叫んだ。経てない程のダメージだが、鈴音とはレベルが違う。
鈴音の脳は、一発のパチンコ玉により、粉々に粉砕されているのだから。
独楽蜂は、ばれないように一つのパチンコ玉をゆっくりと回転させてルーレット台の下に潜り込ませていた。鈴音は高い位置にいるせいで、その動きが見えていなかったのか、この作業はあっさりと成功した。
次の段階は、そのパチンコ玉を高速で回転させ、鈴音に当てると言う、非常に難易度の高い物であった、あくまで目視で標的を決める必要があり、先ほどの震えは、これを当てなければ勝ち目はないと言う怯えからであった。
慎重に慎重にパチンコ玉と鈴音の距離を計算し、独楽蜂は見事その賭けに勝利した。

「ほら、やっぱり脳が死んでも思考はできる！」

かに見えた。
「……え？」
ルーレット台の上に仁王立ちする鈴音の姿に、先ほどと変わった所は一切ない。額の傷跡はおろか純白のドレスには血糊はなく、パチンコ玉が貫通させたルーレット台の孔すらない。
「私は過去の私の可能性も再現可能なの？　言わなかった？」
「ば、バカ言うな！　そんなことできたら、お前は能力を使い放題じゃあないか！」
「そうよ？　悪い？」
たった今、鈴音は『自分が十分前の自分である可能性』を再現させた。それにより、十数秒前に受けた傷は最初からなかったことにされ、この戦いで消費した六十年近い寿命は、一瞬で十分前の本来

の鈴音の寿命へと戻っていた。
これが、新里鈴音。《四真屋敷》の新里鈴音。
「完全なる聖域。近代最強の魔女。《四真屋敷》。それが私の名前。一世紀ほど早く産まれてくれれば幸せだったかもしれないわね」
魔女は笑って、指を鳴らした。
記すまでもなく、独楽蜂はその場で気を失う。
「っても、ここの人間全員生きてるけどね」
興味なさそうを演じているのがバレバレのにやけた表情で、鈴音はその場で二度妖精のようにスッテップを踏んだ。すると、黒服の男と独楽蜂が綺麗にカーペットの上に並べられた。
「そうそう、何で臓器移植の話をしたかと言うと、あれって、完全なロハなんでしょ？　貴方達の臓器や人権は一千万程度で神知教に買われていくのに、勿体ないわよね」
あっけからんと、彼女は作っていない童女のような表情で十三体の脳死体に話しかける。
「臓器をロハで受け渡しするなんて、生きている人間の一部に価値がないなんて、生命の冒涜じゃない？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3186p/

確率と脳死と臓器移植と

2011年1月5日22時24分発行